

くり返して見る幼児の喜び

わたしたちは、“容易に覚える”ということ、安易に喜んでいてはまちがいます。幼児は、気が向けば(“関心”をもてば)どんな漢字でも一ぺんに覚えてしまいます。しかし、容易に覚えたものは容易に忘れることも、免れがたい事実です。

なかなか覚えなかったが、ようやく覚えた　　こういう覚え方をした場合は、容易に忘れないものです。記憶が長持すれば、その間にまたその漢字に出会う機会にぶつかって、復習しますので、さらに記憶は確かになります。そう考えると、「物覚えの悪い子は幸いななり」と言えそうです。

覚えようと覚えまいと、忘れていようと忘れていまいと、とにかく使う機会があったら、一つの漢字を何回でもくり返して提出し、読む機会を与えることが必要です。

皆、よく覚えたから、もうよかろう。　　こうした考え方は、漢字教育に関する限り誤っています。つまり、皆、よく覚えたから、よけい使ってやろう、でなければいけません。

漢字は、“覚える”ことが目的ではなく、“覚えた”あと、“使う”こと、“読む”ことが目的です。幼児が覚えたからこそ、わたしたちは、幼児に対して漢字をほんとに“使う”ことができるわけです。

つまり、親も教師も、幼児に漢字を使って見せる機会があったら、何でもかんでも使って、幼児に漢字を読ませる機会を、できる限り多く

作ることです。

幼児は、その重大な特性の一つとして“くり返し”が好きだ、ということがあります。三歳ぐらまでの幼児は、くり返して飽きることを知りません。ですから、幼児の好むお話には、必ずくり返しがあります。幼児がそのくり返しを好むから、そういうお話が昔からずっと語り継がれてきたのでしょう。

「挑太郎さん、桃太郎さん、お腰につけたものは何ですか」に始まる問答は、三回くり返されます。この三回くり返されるところが、幼児にはたまらなく快い聞きどころなのです。そして、くり返しのある物語を、幼児は、くり返しくり返し聞くことがまた、この上もなく好きです。すっかり覚えてしまっても、なおそのお話をせがみます。

こういう幼児のことですから、漢字の反復提出もまた大歓迎します。「よく覚えてしまっているから、もうおもしろがらないだろう」と気を回して反復を遠慮するのは、おとなのまちがった分別で、幼児は、「よく覚えて知っている字だから、得意になって読める」のです。

この“くり返し”を好む性質が“心の若さ”の正体です。精神が老化していきますと、“くり返し”がたまらなくいやになってきます。

ですから、肉体は、これを使うことによってその若さを保つように、我慢して幼児の相手になり、“くり返し”をくり返してやることは、子どものためでもあり、おとなが自分の“心の若さ”を保つのに役立ちます。